武市安哉のこと

一月二十四日、北海道の浦臼小学校と大篠小学校とが姉妹校の縁むすびをしましたが、今回は、その〝原因〟となった『武市安哉』＝大埔住吉野出身の横顔をご紹介します。

武市安哉は一口にいうと、農民のために一生を捧げた人といえそうですが、その言動は、身長百七十五センチメートル、体重八十六キログラムに似ず、まじめで〝ぼくとつ〟だったそうです。そこがまた人に好かれて、死後その価値が高まったことも容易に想像できます。

私たちの身近かにこんな〝立派な先人〟がいたことは、あまり知られていないようです。よい先輩をもったことを誇りにして、毎日の生活の参考にしたいものです。

○弘化四年（一八四七年）

住吉野に生れる。家は代々農業で、同部落で私塾を開いていた医師、国沢文斎に漢字を学んだ。一家は父母に弟の四人で、三町余りの農地を有した。

十五歳の時、本家武市熊次を相続。農業を営みながら、明治維新という激動の時を経験したことが安哉のその後の進路を大きく変えたようです。

二十歳の頃すでに長男をもち、家長となっていたが、読書に熱中し始めて、勉学のため上阪、上京までするようになる。

○明治五年＝二十五歳

学制が施かれ、大徳寺本堂に大埔小学校が創立、教師となる。

農民の相談をうけながら、農民の生活を少しでも高めるために、物事を誠実に処理。

○明治七年

立志社設立される。

○明治九年

長岡郡を二分する大区の長となる。

○明治十二年

県議会開設、推されて議員となる。二十五年まで議員。（議長一回、副議長三回）

○明治十四年

自由党結成と同時に入党。

○明治十八年＝三十八歳

キリスト教の洗礼を受ける。断酒するとともに、家族や周囲を伝道、受洗をすすめ、講演活動を続ける。

○明治二十年

地租軽減、言論、集会の自由などを国に要求したが、保安条例にふれ、軽禁固二年六カ月の刑で投獄される。（県内で二十一人）

○明治二十二年

大赦により出獄、郷里へ……。推されて再び県議会議員に。

○明治二十三年

第一回国会議員選挙。前年からの経済恐慌で社会情勢不安定。

○明治二十五年

総選挙に自由党から立候補。周囲の青年たちの活躍で多くの闘争、犠牲を経て当選、上京。人々の負担を軽くし、暮しより民主的な社会をつくるためにせいいっぱい働いたが、この頃議会に失望したもよう。家族の協力で伝道活動を続ける。ぼく然と農民の生活向上のために北海道への移住を考えはじめる。十月、視察のため小樽へ。クラーク博士の影響で、自由清新な気風や広大な未開の石狩平野に魅せられて、キリスト教精神による理想的な新農村の建設を目標に、移住の決意を固める。現地検討の結果、移住先を浦臼と決定。

○明治二十六年

国会議員を辞職、大きな話題となる。第一次移住者二十七人（うち女二人、子供四人が含まれる）が入植。本山、土佐山の人が多い。悪環境のなかを必要に開墾、マラリヤなどに苦しむ。

この時の部落の約束ごとは、①どんなに忙しくても日曜日は仕事を休み、礼拝に出席すること。②酒の売買、飲酒を固く禁ずる――と簡単。六年後の村制実施まで、いわゆる〝話し合い〟によりすべてが処理された。

○明治二十七年

第二次移住者到着。（うち二十人が学齢児童）開墾、播種、小屋づくり、井戸掘りなど。五月、学校竣工――聖園学校のものとなる。（明治三十年、文部省より公認）

恵まれた自然環境で学習にはげむ。

十二月二日、函館行きの連絡船内で脳溢血にて急死、四十七歳。

安哉が生命をかけた「村づくり」は中絶し、聖園は試練にあうが、彼自身の存在価値はかえって高くなった。後継者は娘婿の土居勝郎。

○明治二十八年

第三次入植。四百人を数えたが、この時も濃北出身者が多かった。水稲をはじめて収穫する。

○明治二十九年

百三十四戸が入植、開墾は北方へ伸びる。

○明治三十年

新会堂が落成。上部の承認を経て、公式に聖園教会となる。坂本直寛が指導者に。

坂本は、十七歳で坂本龍馬の兄の養子となり、のち立志社に入り、明治十八年受洗した。同二十年、保安条例にふれ入獄、同三十七年、伝道教師となった。

（なお、このご紹介は、＝ある自由民権運動者の生涯＝高知県文教協会刊のなかから掲載させていただきました。）

ミニ広報　金銭は肥料のようなものだ。散布しないと用をなさない。ベーコン（イギリス）